

特集

不明熱を 不明にしないために

実践から考えるケーススタディ

「3週間以上、38.3℃以上の発熱が数回あり、入院、または外来での3日以上
の検査でも診断がつかない」というのが不明熱の定義である。その後、最後まで
ずっと不明の場合もあるが、思わぬところから手がかりが掴めて、解決する場合も
ある。その鍵はどこにあるのだろうか？ 謎を解き明かす原理原則を語ることは大切
なことではあるが、机上で原則を振り回していても問題は解決しない。臨床という
不確実で先の見えにくい現場では、実践での経験値が大きくものをいう。混沌とし
た状況のなかで、原則をどのように用いるのが重要なのだ。

今回は「不明熱を不明にしないために～実践から考える ケーススタディ」と題し
て、その分野の一流の実践者の方々に依頼し、不明熱に関する珠玉の症例を惜し
みなく出していただいた。一見原因不明と思われたこれらの熱の原因がなぜ解明で
きたのか、その鍵はどこにあるのか？ 不明熱を不明にしないために、達人たちの
実践を丁寧にたどり、鍵を解き明かす原理原則(クリニカルパール)の重要性を学ん
でいただきたい。珠玉のケース1つひとつに対して是非主治医になったつもりで向
かっていただければ嬉しく思う。

鈴木富雄(大阪医科大学附属病院総合診療科)